

橋根

勝義

Hashine Katsuyoshi

独立行政法人国立病院機構

四国がんセンター 泌尿器科 医長



患者の QOL を考え、低侵襲治療に挑む 前立腺がんの腹腔鏡手術のスペシャリスト

高齢男性に多く、自覚症状を伴いにくい前立腺がん。早期発見により根治可能ながんだが、日本での検診普及率は低く、早期発見が課題となっている。そんな前立腺がんに対し、QOLを重視しながら治療に当たっているのが、四国がんセンター泌尿器科の橋根勝義医師だ。

先生の専門分野は？

泌尿器のがん全般ですが、私が担当することが多いのは前立腺がんや膀胱がんです。その中でも前立腺がんの腹腔鏡手術に関しては、これまでに120例をこなしており、四国でトップの実績を誇っています。

年間の治療実績は？

泌尿器科全体の主な年間手術数（2010年）は、前立腺がんに関しては腹腔鏡下前立腺全摘除術60例、小線源療法（ヨウ素125）33例。膀胱がんに関しては、膀胱全摘除術16例、そのうち新膀胱造設術13例となっています。

特に力を入れている治療法は？

当院では2009年から腹腔鏡下での前立腺全摘除術を採用した結果、2010年の開腹による全摘除術は0件になりました。この手術は腹壁に数箇所小さな孔を開けてトロカーを設置し、内視鏡や手術器具を挿入して前立腺を摘出する手術で、傷が小さいため術後の痛みが少なく、回復が早いのが特徴です。小線源療法（ヨウ素125）は、前立腺内に放射線の小線源を埋め込み、がん細胞を死滅させる新しい放射線療法で、身体を切らずに治療ができます。新膀胱造設術は、全摘した膀胱の代わりに小腸を使って新しい膀胱を体内に造る治療法で、外観が変わらないのでQOLの向上が図れます。

医師として大切にしていることは？

前立腺や膀胱の治療は、排尿というデリケートな問題に関わるので、患者さんの治療後のQOLを考え、できるだけ低侵襲の治療を提案するようにしています。

この仕事のやりがいは？

泌尿器の疾患は、診察から診断、手術、術後の治療までを一貫して見守れるケースが多く、患者さんが元気になっていくストーリーを直に見ることができます。回復した患者さんの笑顔を見るとやりがいを感じますね。

これからの目標は？

前立腺検査は人間ドックでもオプションのケースが多いので、これからは血液検査だけで前立腺がんのスクリーニングができることを啓蒙し、検診率を上げていきたいですね。

松山市医師会の会員に一言

泌尿器のがんが疑わしい患者さんがいらしたら、いつでもご紹介ください。きっとお役にたてると思います。

Profile

- 日本泌尿器科学会認定指導医、認定専門医
- 泌尿器腹腔鏡技術認定医
- がん治療認定医

- 昭和38年生まれ
- 昭和63年：徳島大学医学部卒、同附属病院泌尿器科入局
高松赤十字病院泌尿器科
- 平成2年：徳島大学医学部附属病院泌尿器科、阿南医師会中央病院泌尿器科
- 平成4年：徳島県立三好病院泌尿器科
- 平成5年：四国がんセンター泌尿器科
- 平成21年：同医長



腹腔鏡下前立腺全摘除術の様子



腹腔鏡手術に使う鉗子類